

## 臨地実習における看護場面の視聴覚教材による看護学生の気づきと学びに関する研究

永井 睦子<sup>1)</sup>

### 要 旨

臨地実習における看護場面の視聴覚教材による看護学生の気づきと学びを明らかにする目的で、臨地実習を経験していない1年次看護学生79名を対象に、自作質問紙による調査を実施した。その結果、「実習のイメージが持てた」「患者への援助の参考になった」の問いに全員が持てた・やや持てたと回答した。足浴(端座位)の援助場面からの気づきを質的帰納的に分析したところ、【温度管理】【体位保持】【学内演習との違い】【患者とのコミュニケーション】【患者への声かけ】【患者の状態・反応】【適切な足の位置】【水分補給】【指導者と協力】【感染予防】の категорияが得られた。また、視聴覚教材を視聴して気づいたこと学んだことでは、【実習のイメージができた】【実習への心構え】【声かけの大切さ】【実習への不安】【練習の必要性】【患者の理解】【実習への期待】【指導者のフォロー】の категорияが抽出された。臨地実習を経験していない看護学生には、視聴覚教材を活用し、実習のイメージや実習への心構えをつくっていく支援が必要である。

キーワード：臨地実習 視聴覚教材 看護学生 看護技術 看護場面

### I はじめに

看護教育において、効果的に看護実践力につながる教育を行っていくことは重要なことである。そのために看護技術の演習等で用いられる学習教材が開発され市販されているが、その多くは模擬患者であったり実際の臨床状況ではないものであったり、リアルな臨床状況ではないものが多いと思われる。また、実際の状況により近いものをめざし、さまざまな工夫をした独自の視聴覚教材の開発もされているところである<sup>1) 2)</sup>。

より効果的に看護実践力につながる教育を行っていくためには、実際の臨床看護状況を記録し、現実の看護場面を見ることが可能で、対象者の状況に合わせた具体的な看護や看護方法を考えられる教材を工夫していくことが重要であると考えられる。

看護学生にとっては、学内で学習した看護技術を臨地実習で実際の患者に対して実施していくことになるのであるが、臨地実習をまだ経験していない看護

学生においては、実際に看護援助をどのように患者に提供していくのか、なかなかイメージが持てないのが現状であると考えられる。そこで、臨地実習で具体的な看護援助を患者に合わせてどのように実施していくのかを臨場感を持ってより具体的に理解するには、実際に看護学生が対象者と関わっている看護場面を見ることが可能であれば、大きな学びとなり、看護実践力につながる学習となるのではないかと考えた。

筆者は、実際の看護場面の状況がわかる視聴覚教材を開発するため、平成24年度から、病院看護職員及び教育研究者と教材開発の検討をはじめ、平成25年度は実際に協力施設、看護職員、患者および家族、看護学校関係者および看護学生などに対して、細心の倫理的配慮および了解のもと、実際の臨地実習看護場面を撮影した。今回使用した臨地実習の看護場面は、このように作成したものであり、協力施設の看護職員、看護学校関係者および看護学生に視聴してもらい、視聴覚教材としての使用の許可をもらっているものである。

1) 川崎市立看護短期大学

今回は、この視聴覚教材の看護場面を、臨地実習を経験していない看護学生が見ることで、実際にどのような気づきや学びが得られるのかについて明らかにしていきたいと考えた。

## II 研究目的

臨地実習における看護場面の視聴覚教材による、看護学生の気づきと学びを明らかにする。

## III 研究方法

### 1 研究デザイン

自作質問紙による調査研究

### 2 研究対象者

短期大学1年次学生で、臨地実習を履修していない看護学生79名のうち、本研究に協力が得られた学生。

### 3 調査期間

平成26年7月

### 4 データ収集方法

実際に撮影した臨地実習の看護場面の視聴覚教材を視聴し、視聴後に自作の質問紙に気づきや学びを記述してもらう。視聴する看護場面は「足浴(端座位)」「足浴(仰臥位)」「車椅子移乗・移送」とした。視聴覚教材の視聴は約20分である。

視聴する看護場面については、1年次学生で疾患について学習していないため、「足浴(端座位)」の場面では、患者は腰痛のため治療とリハビリをしており、足浴時に腰痛はなく腰部にコルセットを装着していることを説明した。他の看護学校の看護学生が受け持ち患者に、指導者である看護師と一緒に実際に援助している場面であることを伝えた。

視聴覚教材の視聴は授業時間内に行うこととし、研究協力への自由意思を尊重するため、質問紙への記入は授業時間外に実施した。

質問紙の回収は、授業時間外に回収ボックスを設置し回収した。

### 5 使用した臨地実習看護場面の視聴覚教材について

臨地実習における看護場面の視聴覚教材は、平成25年度に筆者が作成したものである。協力の得られ

た実習病院において、臨地実習中の看護学生が、受け持ち患者に実際のケアとして計画し実施している看護援助場面を、了解を得たうえで筆者自身が撮影した。

撮影した映像は、筆者が編集しDVDに収録した。収録したDVDは、協力施設の看護職員、看護学校関係者および看護学生に視聴してもらい、視聴覚教材としての使用の許可を得ている。今回使用した看護場面は、基礎看護学実習で学生が援助することの多い「足浴(端座位)」「足浴(仰臥位)」「車椅子移乗・移送」の3場面とした。

### 6 調査内容

質問紙は無記名とし、その内容は、「実習のイメージが持てた」「患者への援助の参考になった」「初めての実習に向けて参考になった」の各質問については、そうである・ややそうである・あまりそうでない・そうでない、の4段階尺度で回答を求めた。また、「足浴(端座位)」「足浴(仰臥位)」「車椅子移乗・移送」の各看護場面の援助について、気づいたことを自由記載してもらった。さらに、この3つの看護場面の視聴覚教材を見たことでの気づき・学びなどを自由記載してもらった。

### 7 データ分析方法

質問紙の各項目は単純集計を行う。

記述内容については、質的帰納法的に分析する。記述されたままの表現を大切にしつつ、意味内容を整理し抽出する。

看護場面の援助について気づいたことでは、内容の共通性・類似性でサブカテゴリー化し、さらにサブカテゴリーの類似性・相違性からカテゴリー化した。

3つの看護場面の視聴覚教材を見て気づいたこと・学んだことについては、内容の共通性・類似性からカテゴリー化した。

データ分析の厳密性を確保するために、サブカテゴリー・カテゴリー化したものを再度内容から見直した。また、妥当性の確保にあたっては、教育研究者のスーパーバイズを受けた。

### 8 倫理的配慮

本研究は川崎市立看護短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。(研究倫理審査結果通

知番号 第R50-1号) 研究対象者に、研究の目的、個人情報の保護、研究参加への同意は自由意志であり、途中で中断することが可能であり、研究協力の諾否によって何ら不利益にならないこと、学習・成績・評価には一切関係しないこと、データは研究以外には使用しないこと、また、資料の保管・管理についても厳重に管理することを文書と口頭で説明し、提出したことで同意を得たことを説明した。

また、視聴した臨地実習看護場面については、個人情報が含まれる内容であるため、視聴覚教材作成のために十分に説明し同意を得て撮影した画像であることを説明したうえで視聴してもらい、視聴覚教材に映し出されている患者・看護学生の個人情報の保護についても協力を依頼した。

なお、臨地実習看護場面の視聴覚教材は、川崎市立看護短期大学研究倫理委員会の承認を得て筆者が作成したものである。(研究倫理審査結果通知番号第R35-1号)

## IV 結果

### 1 質問紙回収結果

回収した質問紙は71であり、回収率89.9%、有効回答率100%であった。

なお、看護場面で気づいたことについては、「足浴(端座位)」「足浴(仰臥位)」「車椅子移乗・移送」とそれぞれに気づきの記述があったが、「足浴(端座位)」における記述内容が多かったこと、気づきの内容から抽出されたカテゴリーが重複して見られたため、今回は「足浴(端座位)」(写真1-1、1-2、1-3)の援助場面の結果について報告する。

### 2 「実習のイメージが持てた」等について

1) 「実習のイメージが持てた」の質問では、持てた47名(66.2%)、やや持てた24名(33.8%)であり、合計100%であった。(図1)

2) 「患者への援助の参考になった」の質問では、参考になった44名(62.0%)、やや参考になった27名(38.0%)であり、合計100%であった。(図2)

3) 「初めての实習に向けて参考になった」の質問では、参考になった43名(60.6%)、やや参考になった27名(38.0%)であり、合計98.6%であった。(図3)



写真 1-1 足浴援助場面



写真 1-2 足浴援助場面



写真 1-3 足浴援助場面

### 3 「足浴(端座位)」の援助場面で気づいたこと

「足浴(端座位)」の援助場面で気づいたことは、62名が記述していた。記述された内容を分析した結果、101の内容から、27のサブカテゴリー、10のカテゴリーが抽出された(表1)。ここでは10のカテゴリーとそれを導き出したデータについて記述する。カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを『 』、内容を「 」で示す。

10つのカテゴリーは【温度管理】 【体位保持】 【学内演習との違い】 【患者とのコミュニケーション】

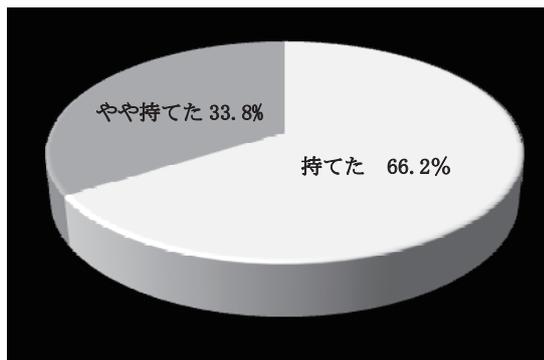


図1 実習のイメージが持てた

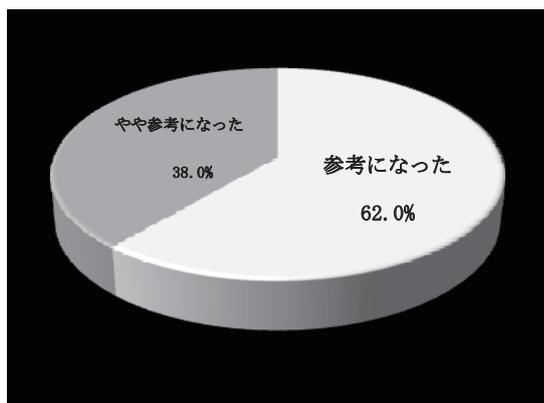


図2 患者への援助の参考になった

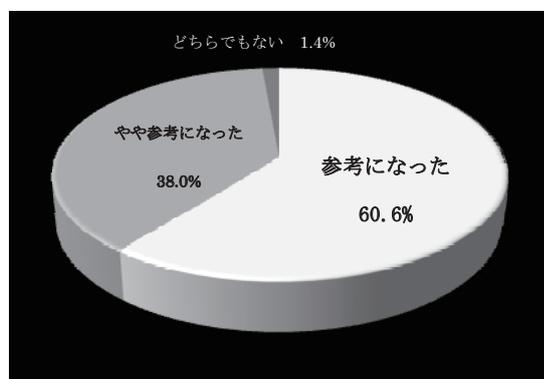


図3 初めての实習に向けて参考になった

ン】【患者への声かけ】【患者の状態・反応】【適切な足の位置】【水分補給】【指導者と協力】【感染予防】であった。

#### 1) 【温度管理】

このカテゴリーは5つのサブカテゴリーから導き出された。『温度確認の必要』では「温度は人によって感じ方が違うため、患者さんの意見を聞くことは大切」であり、「何度もさし湯をしていた」「お湯を調整するときに熱いお湯が患者さんにかか

らないようにして良い」など『さし湯の必要と配慮』を述べていた。『患者さんの好み』では、「実際の患者さんでは温度に好みがあることをより感じる事ができた」、『準備するお湯の温度』では「患者さんによって気持ちが良いと感じる温度は異なるので、注意が必要だと思った」、『保温』では「足をお湯につけてすぐに洗うのではなくしっかり温めて洗っていた」など患者の個別性や好みに合わせた温度管理について計22の内容があった。

#### 2) 【体位保持】

このカテゴリーは4つのサブカテゴリーから導き出され、17の内容があった。『看護師による体位保持』では、「後ろから看護師が支えていた」と指導者である看護師が背部を支えていたことに着目しており、「端坐位の時後ろから支えてあげると安定する」「背中後ろに布団やクッションを置いてやった方が背中の負担が少ないと思った」など『体位保持の工夫』を述べていた。また「支えがなくてつらそうだなと思った」「患者さんの体位が不安定」など『体位不安定による患者の苦痛』に気づき、「後ろで支えてあげたり、柵をしてあげたりと危険な部分を想定して対処することが必要」と『安全への配慮』を考えていた。

#### 3) 【学内演習との違い】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリーがあり、14の内容があった。「演習とはやり方が違った」「湯の温度を保つために桶で蓋がわりしていたのは、使えるものをフルでやっている」「ベッドの構造で手に支えていく場がないときはどうしたらよいのか？」など学内演習との違いから『援助の仕方・工夫』や疑問が生まれていた。また、「学校では端坐位の時は足浴用のバケツを使ったが、ここでは通常のバケツを使っていた」など『使用物品』の違いを述べていた。

#### 4) 【患者とのコミュニケーション】

このカテゴリーは4つのサブカテゴリーから導き出された。『患者の笑顔・喜び』では「会話を楽しんでいる様子で笑顔も見られ、学生と患者、互いの緊張感がほぐれていた」「ありがとうございますと言ってくれていて、とてもうれしいだろうなと思った」などがあつた。『患者との関係を深める』では、「目を合わせて湯の温度を確認することで患者との関係を深めながら援助をしている」というものがあつた一方で、「患者さんに質問したあと

すぐに作業に移っていて、もっと目をみて受け止めたほうが良いと感じた」と『コミュニケーションの工夫』を述べているものがあった。また、「端座位で患者さんにはまじまじと見られながら援助するので、緊張しそう」「余裕がないと行動しながら会話するのは難しい」と『緊張と難しさ』など、計12の内容があった。

#### 5) 【患者への声かけ】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリーがあり、11の内容があった。『声かけの少なさ』がある一方で、「声かけをされていてよかった」「参考になった」と『声かけの大切さ』に気づいていた。

#### 6) 【患者の状態・反応】

このカテゴリーは4つのサブカテゴリーから導き出され、11の内容があった。『患者の状態』では、「もっと動けない患者さんを援助するのかなと思っていましたが、支えなしで端座位ができる患者さんであったので驚いた」や「足の可動域を良いタイミングで援助しながら聞いていた」、『患者の協力』では「患者さんに割と協力してもらえることが多い」など、患者の状態をとらえていた。『患者の変化』では「足浴後の患者さんの顔がすっきりしたようにみえた」、「相手の表情などをみながら気づく能力が必要だと思った」など、『患者の反応に気づく能力』の必要性などに気づいていた。

#### 7) 【適切な足の位置】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリーから導き出され、6の内容があった。「バケツのふちに足を置いてバケツをひっくり返さないのかと思った」「洗った足をバケツのふちに置くのはどうか」など『足を置く位置の疑問』を持っていた。また「新聞紙の上にバスタオルを敷いておくと洗い終えた足をバケツの外に出しておき患者の姿勢もより安楽ではないか」と、患者にとってより『安楽な足の位置』から具体的な援助方法についての気づきがあった。

#### 8) 【水分補給】

このカテゴリーは2つのサブカテゴリーから導き出され、5の内容があった。『水分補給をしていた』ことに気づき、「最後に水分補給もしっかりしていて参考になった」「患者さんに最後飲み物を渡すところまでやっていて、実習室でやるよりも心配りができていた」など『水分補給の気配り』をしていたことに気づいていた。

#### 9) 【指導者と協力】

このカテゴリーでは、「看護師と協力して足浴を行っているのが伝わってきた」「背中を支えてくれる看護師さんがいて心強いように思った」と、指導者と協力して患者の援助をしていることが述べられていた。

#### 10) 【感染予防】

「学生自身のグローブをつけるタイミングが遅いのではと感じた。看護師が感染などから身を守ることはひいては感染の拡大を予防し、患者の身を守ることになるのでは」と『感染予防』の必要性についても考えていた。

### 4 視聴覚教材を見て気づいたこと・学んだこと

視聴覚教材を見て気づいたこと学んだことについては、39名が記述していた。記述された内容を分析した結果、55の内容から、9つのカテゴリーが抽出された(表2)。

9つのカテゴリーは、【実習のイメージができた】13、【実習への心構え】9、【声かけの大切さ】7、【実習への不安】7、【練習の必要性】7、【患者の理解】6、【実習への期待】3、【指導者のフォロー】2、【援助者の体勢】1であった。

「同じ学生が援助している映像を見ることで具体的なイメージを得ることができた」「実際に実習生のやっていることがよくわかって勉強になった」など【実習のイメージができた】ことで、「この人なら安心という印象はどことなく感じるので、しっかりと予習し自信を持って実習にのぞみたい」「私も実際の場面では緊張してそうになってしまうだろうから気をつけよう」など【実習への心構え】が持て、「演習とは異なる現場をイメージでき、はやく実習してみたいという気持ち」「とにかく実習楽しみ」など【実習への期待】が述べられていた。一方で、「自分にできるか不安になった」「実感が持てたゆえ、本番が怖くなった」など【実習への不安】が述べられていた。また、具体的な援助場面から、「声かけを最後までしっかり行っているところを見習いたい」、「声かけが多くて、やはり大切だと思いました」など【声かけの大切さ】を感じるとともに、「患者さんも私たちに協力してくれる」「患者さんの笑顔も多く、嬉しそうにみえた」など【患者の理解】が述べられていた。「看護師が常にそばにいてくれて、アドバイスをくれるということ

表1 「足浴(端坐位)」の援助で気づいたこと

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容
温度管理 22	温度確認の必要 6	温度確認を必ず行う。 湯かげんいいですかと聞いていた。 温度は人によって感じ方が違うため、患者さんの意見を聞くことは大切なんだと思った。 ぬるい、熱いなどコミュニケーションを取りながら調整していた。 湯温確認が参考になった。 患者にぬるいといわれていたのでお湯の温度はしっかり確認するようにする必要があると思った。
	さし湯の必要と 配慮 6	お湯を調整するとき熱いお湯が患者さんにかからないようにして良いと思いました。 個人差でお湯、あつめが良いと感じる人もいるので、さし湯は大切だなと思った お湯がぬるいため何度もたし湯していた。 さし湯の際に直接足にかからないようにしていた。 温度が冷えないためか、バケツの上に洗面器をかぶせていた。 バケツにベースンを蓋がわりに使い、お湯の温度が保たれるようにしている。こまめに湯を足し冷めないようにしている。
	患者さんの好み 5	学生同士の演習では「こんなものかな?」と忘れてしまいがちな湯温も、患者さんからちゃんと「ぬるい」と言ってくれている。 ぬるかったらはっきりと言ってくれる。 温度を好みに合わせて行うことが大切である。 実際の患者さんでは温度に好みがあることをより感じる事ができた。 ぬるいと言っていたことから、湯の温度は個人差があって確認することが大切なんだと改めて気づいた。
	準備するお湯の 温度 3	患者さんにあった温度のお湯を準備することが必要。 患者さんによって気持ちが良いと感じる温度は異なるので、注意が必要だと思った。 用意するお湯の温度に気をつけなくてはいけないと感じました。
	保温 2	足をお湯につけてすぐに洗うのではなくしっかり温めて洗っていた。 保温に心掛けていた。
体位保持 17	看護師による体 位保持 7	後ろから支えている人がいる。 ベッド柵をしていなかった。もう一人の看護師が患者さんをささえていた。 後ろから看護師が支えていた。 ベッドの周りに支えになるものがなかったが、看護師が支えていて良いと思った。 端坐位になっている状態から後ろに倒れないように看護師が背中を支えていた。 ナースに患者の背中を支えてもらっている。 端坐位の状態でつかまるところがなかったため、指導者のナースが後ろから支え安全を確保していた。
	体位保持の工夫 5	背中の後ろに布団やクッションを置いてやった方が背中への負担が少ないと思った。 端坐位の時後ろから支えてあげると安定するんだなと思った。 また腰にコルセットをしているのであれば布団かなにかを後ろに置きたいなと思いました。 足をあげている時に患者さんが後ろによりかけて手をついていた。寄りかかれるものやつかまるところあつたらよかったと思った。 患者さんの両側ともつかまるところがないのがきになった。片側ベッド柵をつけるなどして片手でつかまってもらった方が安定してよいのかなと思った。
	体位不安定によ る患者の苦痛 3	ある程度深さのあるバケツを使用した分、患者さんの足を洗おうと持ち上げるとバケツの高さからか、必要以上に足をもちあげるかたちになるため、患者さんの体位が不安定になっているように見えた。 支えがなくてつらそうだなと思った。 支えがなかった。
	安全への配慮 2	患者さんの状態に合わせた安全への配慮を心掛けたいと思いました。(1人の看護師が患者を支え、もう1人は足浴の援助) 水で洗い流すときに足をあげて体のバランスがとれない場合もあるので、後ろで支えてあげたり、柵をしてあげたりと危険な部分を想定して対処することが必要だなと思った。
学内演習との 違い 14	援助の仕方・工 夫 10	湯の温度を保つためにおけでふたがわりしていたのは、使えるものをフルでやっている感じがしていいなと思いました。 演習とはやり方が違った。 私たちは柵をしてつかまるところを確保してと習うが、必ずしもそれがかなう形のベッドとは限らないので、発想の転換がいる。 ベッドの構造で手に支えていく場がないときはどうしたらよいのか? タオルでの仕上げの拭くときタオルがヒラヒラしていた。指の先1本1本丁寧に吹き上げる必要があると思う。 座位ができて長時間だと疲れてしまいそうなので迅速にやるのが良いと思いました。 靴下は新しいものにした方が気持ち良いのではと思った。 一人で端坐位がとれる患者であるためベッド柵は立てず、患者が座っていられるスペースを広くとっている。 スペースが狭い。 柵をあげていなかった。
	使用物品 4	大きなバケツを使用していてひざ下まで足が入るようにしていた。 学校では端坐位の際は足浴用のバケツを使ったが、ここでは通常のバケツを使っていた。 バケツを使っているのを見て学校みたいにやりやすい環境整備ではないことを実感。 普通のポリバケツで足浴をしていた。

表1 「足浴(端坐位)」の援助で気づいたこと(つづき)

カテゴリー	サブカテゴリー	内 容
患者とのコミュニケーション	患者の笑顔・喜び 4	お湯がぬるかったので笑いがうまれていいなと思った。 会話を楽しんでいる様子で笑顔も見られ、学生と患者、互いの緊張感がほぐれていた。 笑いも起きていて雰囲気も良いなと感じた。 「ありがとうございました」と言ってくれていて、とてもうれしいうらなと思った。
	患者との関係を深める 3	バケツの前でしゃがみ目を合わせて湯の温度を確認することで患者との関係を深めながら援助をしているなと思った。 患者さんも積極的に会話をしていた。 背中を支えている看護師がコミュニケーションをとっていると思った。
	コミュニケーションの工夫 3	患者さんと会話をしながら援助をするという点が大切なことだと思い、できるだけ多くのコミュニケーションをとりながら援助をしていけたらよいと思いました。 かがんで下ばかりみていたから、患者さんの表情とかもつと見られたいいし、自分も気をつけたいと思う。 患者さんに質問したあとすぐに作業に移っていて、もっと目をみて受け止めたほうが良いと感じた。
	12 緊張と難しさ 2	端坐位の患者さんにはまじまじと見られながら援助するので、だいぶ緊張しそう。 余裕がないと行動しながら会話するのは難しいと気づいた。
患者への声かけ	声かけの少なさ 6	声掛けが少ないと思った。 声掛けが少し足りないのではと思うところがありました。 声掛けをあまりしていない。 患者さんとのコミュニケーションの少なさが気になった。会話がなかった。 男子学生の足浴が全然聞こえなかった。ただ事務的に足浴したという印象。 声掛けー男子学生だからなのかあまり積極的に声をかけていない気がした。(音声が聞き取りにくかったためならごめんなさい)
	11 声かけの大切さ 5	声掛けが参考になった。 患者さんに何度も声掛けをおこなったり、表情を見ていたので自分も実習の際に大切にしたいと思った。 患者さんの顔を見ながら声掛けをしていて良かった。 患者さんへの声かけ、安全確認をしっかり行っていた。 声掛けを良くしていた。
患者の状態・反応	患者の状態 4	もっと動けない患者さんを援助するのかと思っていたが、支えなしで端坐位ができる患者さんであったので驚いた。 足の可動域を良いタイミングで援助しながら聞いていた。 足は上がりますかなど可動域を確認して行う。 ベッドの柵が大腿の裏にあたっていて痛くないのかなとおもった。
	患者の協力 3	患者さんに割と協力してもらえることが多い。 患者さんが協力的。 できる場所は最大限してもらっていた。
	11 患者の変化 2	足浴を始める前と後では患者さんの口数が増えたなという印象を受けました。 足浴後の患者さんの顔がすっきりしたようにみえた。
	患者の反応に気づく能力 2	この患者さんのように「もっとこうしてほしい」と要望があれば患者のニーズに応えやすいが、我慢して「大丈夫です。」と言ってくれる患者さんの場合は相手の表情などをみながら気づく能力が必要だと思った。 患者さんの要望に応えていた。すぐ臨機応変にできるようにする。
適切な足の位置	足を置く位置の疑問 4	バケツのふちに足を置いてバケツをひっくり返さないのかと思った。 ベッドが少し高くて足が下につかなかったのか、拭いた片足をバケツの上ののせていた。 新聞紙があっても足を床に着けたくはないもんなんだと思った。 洗った足をバケツのふちに置くのはどうかと思う。
	6 安楽な足の位置 2	足を洗い終わった後、片方の足をどこにおいてあげたらいいのか私もわからなかった。バケツのふちだとつらいかと思った。 新聞紙の上にバスタオルを敷いておくと洗い終えた足をバケツの外に出しておき患者の姿勢もより安楽ではないかと感じた。
水分補給	水分補給をしていた 2	終わった後の水分補給。 足浴が終わった後で飲み物を渡していた。
	5 水分補給の気配り 3	最後に水分を取らせることなど忘れていなかった。 最後に水分補給もしっかりしていて参考になった。 患者さんに最後飲み物を渡すところまでやっていて、実習室でやるよりも気配りができていた。
指導者と協力	看護師と協力 2	看護師と協力して足浴を行っているのが伝わってきた。 背中を支えてくれる看護師さんがいて心強いように思った。
感染予防	手袋をつけるタイミング 1	学生自身のグローブをつけるタイミングが遅いのではと感じた。看護師が感染などから身を守ることはひいては感染の拡大を予防し、患者の身を守ることになるのでは?と考えた。

表2 視聴覚教材を見て気づいたこと・学んだこと

カテゴリー	内 容
実習のイメージができた 13	<p>実習についての具体的なイメージを持つ機会になった 4</p> <p>同じ学生が援助している映像を見ることで具体的なイメージを得ることができた 3</p> <p>何度か病院見学をしたが実際に自分が援助しているところはイメージできなかった</p> <p>イメージトレーニングしていきたい</p> <p>それぞれが個別性があり、それに沿った援助をしている</p> <p>現実を知ることができてよかった</p> <p>参考になることがたくさんあったので活かしていきたいと思った</p> <p>実際に実習生のやっていることがよくわかって勉強になった</p>
実習への心構え 9	<p>映像のなかで足をきれいにすることや手順に集中するあまり、患者さんの笑顔や話していることを見逃す、聞き逃すところがあって、私も実際の場面では緊張してそうになってしまうだろうから気をつけようと勉強になった</p> <p>一連の援助の流れを頭に入れ、当日には患者さんの状態を考えて応用できなくてはならないと思った</p> <p>看護計画を立てるのが難しいとおもった</p> <p>終了などの挨拶をきちんとする</p> <p>この人なら安心という印象はどことなく感じるの、しっかりと予習し自信を持って実習にのぞみたい</p> <p>コミュニケーションをきちんととることが大切であると感じた</p> <p>患者さんに対して引きすぎないで積極的にアプローチできるようにしていきたい</p> <p>さまざまな患者さんがいるため臨機応変な対応が必要であると感じた</p> <p>緊張していきたくてはいけないことを忘れることもあると思うので注意したい</p>
声かけの大切さ 7	<p>声かけを最後までしっかり行っているところを見習いたい 2</p> <p>声かけが多くて、やはり大切だと思いました。</p> <p>声かけを適切に行い、患者看護師間でこれから行うことの共有がしっかりできていた</p> <p>声かけはきちんと相手を見てする</p> <p>何をやるにも声かけをしてからおこなっていたのがよかった</p> <p>会話や声かけをもっとしっかり聞きたかった</p>
実習への不安 7	<p>自分にできるか不安になった 3</p> <p>早く患者さんに援助したいと思うがまだ自分の技術では未熟であり、患者さんに不安や不快感を感じさせてしまうのではないかと考える。</p> <p>自分が実習に行ったときに本当にあのスピードやしっかりした受け答えができるのか少し不安になった</p> <p>実感が持たゆえ、本番が怖くなった</p> <p>実習室とは違う環境で援助を行うことへの不安も感じた</p>
練習の必要性 7	<p>夏休みにたくさん練習して臨みたい 2</p> <p>夏休みに練習を重ねて、学校で学んだことを活かせるようにしたい</p> <p>実際の映像を見て自身が実習に出るまでにもっと練習をしておかなければいけないと思った</p> <p>もっと練習を積んでから患者へ援助したいと思った</p> <p>授業外練習が必要なことにより気づかされた</p> <p>復習意欲がわいた</p>
患者の理解 6	<p>患者さんも私たちに協力してくれる</p> <p>技術が滞りなくスムーズに行えることも大切ですが、会話で笑顔が見えるのが気持ちを明るくさせ、協力につながる</p> <p>患者さんの笑顔も多く、嬉しそうにみえた</p> <p>ケアが終わった後に笑顔になってくれるとケアした側も安心できる</p> <p>看護学生が援助することについて、患者さん自身はどう思っているのか気になる</p> <p>方法で学んだことは互いに学生同士なのでこれからすることはわかっているが、患者さんはわかっていないということがよくわかった</p>
実習への期待 3	<p>演習とは異なる現場をイメージでき、はやく実習してみたいという気持ち</p> <p>援助してもらっていた患者さんがみんな嬉しそう喜んでくれることを私もやりたいと思った</p> <p>とにかく実習楽しみ</p>
指導者のフォロー 2	<p>看護師が常にそばにいてくれて、アドバイスをくれるということを知れてよかった</p> <p>指導者さんがしっかりとフォローしてくれていた</p>
援助者の体勢 1	<p>看護学生の腰にかなり負担がかかりそうな体勢をされていて大変そうだと感じた</p>

を知れてよかった」と【指導者のフォロー】を感じていたが、「看護学生の腰にかなり負担がかかりそのような体勢をされていて大変そう」と【援助者の体勢】の課題にも気づき、「夏休みにたくさん練習して臨みたい」「もっと練習を積んでから患者へ援助したいと思った」など、【練習の必要性】が述べられていた。

## V 考察

### 1 臨地実習の看護場面の視聴覚教材の学習効果

今回、臨地実習を履修していない看護学生を対象に、臨地実習看護場面の視聴覚教材を視聴してもらったところ、すべての学生が実習のイメージが持てた・やや持てたと回答した。また、同様に、すべての学生が患者への援助の参考になった・やや参考になったとの回答があったことから、臨地実習の看護場面の視聴覚教材は、まだ臨地実習を履修していない看護学生にとって、イメージが持て、これから実際の患者への援助をするにあたって、多くの気づきや学びを得ることができるものであったと考えられた。

イメージを持つということは、予想可能な状況であったり像を描くことができたりと、ほんやりとした理解から具体性をもって理解が進むことであると考えられる。視聴覚教材はこのようにイメージを描くために重要な教材であるとともに、学内での学習では体験できない、実際の病室で看護師とともに、実際の受け持ち患者に援助を実施するというリアリティが感じられるものであったと捉えられる。

看護技術の学習教材として、授業で用いているテキストをはじめ、さまざまな資料や文献<sup>3) 4) 5)</sup>においても、写真や図でわかりやすく紹介されていたり、近年では動画をスマートフォンで再生できる参考書<sup>6)</sup>も出版されていたりする。しかし、そのほとんどは模擬患者で模擬設定された状況で教材作成のために敢えて設定して撮影したものである。実際の臨場感は得られにくいという限界があるが、今回使用した臨地実習の看護場面は、本当の患者に対して看護学生が計画した援助を指導者とともに実施しているものであったことから、映像で体験できる最もリアリティのある学習になったのではないかと考える。

このような臨地実習の看護場面の視聴覚教材は、多くの関係者の協力と理解を得たうえで、細心の倫

理的配慮のもとに作成することが可能であったので、今後も学習効果を高めるために、このような視聴覚教材の作成を試みたり、実際の臨床状況により近い想定をした教材や教育方法の工夫をしたりすることで、患者への援助の実践的な学びにつながるようにしていくことが大切ではないかと考える。

### 2 看護場面からの看護学生の学び

「足浴(端座位)」の援助場面での気づきからは、101の内容から10のカテゴリーが得られ、筆者の予想以上にさまざまな視点で具体的な学びが得られていたと考える。

【温度管理】については、看護技術の学内演習での学びから、学生が最も注意を傾けていた視点の一つであり、また患者の個別性や好みに合わせて実施するという個別性への意識も学ばれていると考えられた。足浴中に看護師が後ろから支えて【体位保持】していたことから、患者の安全や安楽を意識し、より安楽で安全に実施するための体位保持の工夫の必要性を考えることができていると捉えられた。また、学内の実習室と実際の病室の違いや、学内で使用している物品と実際に病院で使っている物品の違いなどから【学内演習との違い】を比較的多く気づいていることがわかった。臨地実習の経験のない学生においては、学内演習で看護技術を学習した時の経験がすべてであり、実際に臨地実習で援助の準備をする時に物品が違うことで戸惑うこともあるが、今回の視聴覚教材ではそのことにも気がつくことができおり、臨地実習での心構えにもつながるのではないかと考えられた。また、違いだけでなく患者にとってどうしたらよりよい援助になるのか疑問も生まれ、援助の仕方や工夫を考える題材になると思われた。

【患者とのコミュニケーション】、【患者への声かけ】や【患者の状態・反応】からは、学生は患者の表情をよく観察し、声かけの大切さを感じていることがわかった。初めての臨地実習の前であり、患者とどのようにコミュニケーションをとり、患者とどのように関係を作っていくのかについては、学生にとって関心の高いことであり困難を感じることである<sup>7)</sup>。しかし、緊張と難しさを感じている一方で、患者の笑顔があったり、ありがとうと言われたりすることがうれしく、患者との関係を深めたいと思っている1年次学生の実態が感じられた。また、

学内演習では端座位での足浴も経験しているが、ベッド上安静でほぼ全介助の患者設定で演習することも多く、患者に聞いて協力を得ることや、患者の表情の変化などにも気づいてとらえることができていることがわかった。これらのことから、今回の視聴覚教材は、具体的な援助を通して患者とどのようにコミュニケーションをとり、どのように患者の反応をとらえていくかといった視点でも大きな学びを得ることができる視聴覚教材であったと考える。

そのほか、【適切な足の位置】【水分補給】【指導者と協力】【感染予防】など具体的な援助方法についての気づきもあった。足浴の援助が終わった後に水分補給をしていた場面からは、学内演習ではできていなかった援助だったが、参考になる援助としてしっかり見ることができていたことがわかった。また、学生が単独で患者に援助しないことをオリエンテーションで伝えているが、では実際に、指導者とどのように協力して患者に援助していくのかといったことを、具体的に理解することができたのではないかと考えられた。

### 3 臨地実習への教育支援への示唆

臨地実習看護場面の視聴覚教材を視聴したことで、やはり【実習のイメージができた】【実習への心構え】ができたことがわかった。臨地実習前には必ずオリエンテーションを実施しているが、言葉だけでは伝わらないことも多く、視聴覚教材を活用して実習のイメージがもて、それぞれが臨地実習への心構えをもつことができるような支援が重要であると考えられた。また、実習に対しては【実習への期待】と【実習への不安】がある<sup>8)</sup>と考えられるが、看護技術の【練習の必要性】を具体的な行動に移すよう促していくことも重要な支援であると考えられる。さらに、学生がどのように患者や指導者と関わりどのように関係をとっていけるといいのかについて、事前の不安はなるべく解消できるようにするために、臨場感のある場面設定や状況設定をした学内演習の工夫<sup>9)</sup>や、今回のような実際の臨地実習看護場面の映像を活用するなど、より看護の実際の状況が理解しやすい支援の工夫が必要であると考えられる。

## VI 結論

- 1 臨地実習看護場面の視聴覚教材は、実習のイメージが持て、患者への援助の参考になるものであった。
- 2 「足浴(端座位)」の援助で気づいたことから、【温度管理】【体位保持】【学内演習との違い】【患者とのコミュニケーション】【患者への声かけ】【患者の状態・反応】【適切な足の位置】【水分補給】【指導者と協力】【感染予防】のカテゴリーが抽出された。
- 3 視聴覚教材を見て気づいたこと・学んだことから、【実習のイメージができた】【実習への心構え】【声かけの大切さ】【実習への不安】【練習の必要性】【患者の理解】【実習への期待】【指導者のフォロー】【援助者の体勢】のカテゴリーが抽出された。
- 4 臨地実習を経験していない看護学生には、視聴覚教材を活用し、実習のイメージや実習への心構えをつくっていく支援が必要である。

## VII 研究の限界と今後の課題

本研究の結果は、臨地実習看護場面の視聴覚教材を、臨地実習を経験していない1年次学生を対象として、その気づき・学びを抽出したものである。1学年だけの結果であり、今後研究を継続して研究を重ね、学生の学びの内容を精選していく必要がある。また、臨地実習を経験した学生ではその気づきは異なると思われる。それぞれを比較することで、臨地実習を経験していない学生の気づき・学びの特徴を明確にしていくことで、臨地実習前の学習支援につなげていくことを課題としたい。

## 謝辞

今回の調査研究にあたりご協力いただきました、短期大学1年次学生の皆様に心より感謝申し上げます。また、今回使用しました臨地実習看護場面の視聴覚教材の作成におきましてご協力いただきました、病院関係の皆様、看護学校関係の皆様、撮影にご協力いただきました、看護職員、患者・家族、看護学生の皆様に感謝申し上げます。

本研究の一部は、第25回日本看護学教育学会学術集会において発表しました。

## 文献

- 1) 今泉郷子, 住本和博, 清水佐智子, 有田清子, 茂野香おる, 坂下貴子, 目黒悟, 屋宜譜美子. 筋肉内注射に関するDVD-ROM自己学習教材の開発とその評価. 川崎市立看護短期大学紀要. 10(1), 2005, p. 31-42.
- 2) 浅井さおり, 小泉未央, 沼里礼美, 金子昌子. 看護学生の高齢者理解のための視聴覚教材の評価 生活インタビューで構成した試作教材の有用性. 獨協医科大学看護学部紀要. 9, 2015, p. 21-33.
- 3) 大森武子, 大下静香, 矢口みどり. 仲間とみがく看護技術 イメージ&ビルド&アクション. 医歯薬出版株式会社, 2010.
- 4) 医療情報科学研究所編集. 看護技術がみえるvol. 1 基礎看護技術. メデックメディア. 2015.
- 5) 石田弘子編著. ナースのためのやさしくわかる基礎看護技術. ナツメ社, 2016.
- 6) 竹尾恵子監修. 看護技術プラクティス 第3版. 学研, 2015.
- 7) 大澤健司. 基礎看護学実習における患者とのコミュニケーション困難要因. 東京厚生年金看護専門学校紀要. 16(1), 2014, p. 29-36.
- 8) 近藤奈緒子, 杉山恵子, 佐藤和子. 初回実習前に学生が捉えている患者とのコミュニケーションと実習前に抱く不安 基礎看護学実習 I 前のアンケート. 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要. 4, 2008, p. 7-11.
- 9) 秋山朋子, 菊地祐子, 片山美恵子, 根本由利子. 基礎看護学実習 I - 1における学生の学びの分析と課題. 福島県農村医学会雑誌. 50(1), 2008, p. 36-39.